

部分的核実験禁止条約改定会議での
広島市長の演説

1991年1月
広島市長 荒木 武

議長

私は、世界平和連帯都市市長会議の会長である広島市長の荒木武であります。

本日、この壇上から人類史上、最初の原子爆弾による惨禍を被った広島市長として、また被爆者の一人として発言の機会が与えられたことに対し、心から感謝申し上げる次第であります。

議長

ヒロシマは、1945年8月6日午前8時15分、わずか15キロトンの玩具に等しい原子爆弾によって一瞬にして壊滅し、十数万人の尊い生命が喪われたことを、昨日のことのよう^に記憶しています。私も、爆心地から3.5キロメートル離れた工場の事務室で被爆し、幸いに身体への負傷は免れたのですが、20日後に原因不明の吐血と発熱におそわれました。広島を離れて治療を行ったおかげで、今日まで生き延びておりますが、今も当時の地獄さながらの惨状が脳裏に焼きついて離れません。辛うじて生き残った被爆者は、放射能障害の苦痛と不安にさいなまれ、45年を経た今日もなお、命をむしばまれ死に行く者が後を絶ちません。

議長

ヒロシマは、この凄惨な被爆体験に基づき、一たび核戦争が始まれば、人類の滅亡と文明の終焉が明らかであることを予見し、ひたすら、核兵器の廃絶と戦争の放棄を全世界に訴え続けてきました。そして、今、私は声を大にして訴えます。

「ヒロシマを忘れてはいけない!」、「ヒロシマを再び繰り返してはならない!」

議長

核軍縮の具体的かつ緊急の課題は、核実験の全面的禁止であり、多くの国々と市民がそれを強く望んでいます。国際的安全保障のためには、核抑止力が必要であり、そのために核実験を継続しなければならないという論理は、正に恐怖の均衡論であると断じなければなりません。そういった武力と威嚇の政治をこそ世界の圧倒的多数の世論は反対しているのであります。

議長

被爆都市ヒロシマは、いかなる国の核実験に対しても、断固反対し、1968年から今日まで実に514回の抗議を行ってきております。しかし、ヒロシマの度重なる抗議にもかかわらず、核実験は依然として続けられており、このことは、人類を破滅へと導く暴挙以外の何物でもなく、断じて容認することはできません。核実験場の周辺では、住民の放射能障害が憂慮されながらも、科学的、医学的な

調査や治療等の対応が極めて不十分であると聞き及んでおり、ネバダ・セミパラチンスク運動からもヒロシマへ悲鳴にも似た救済の要請が届いております。核保有国は、人道上の立場からも、直ちに核実験を禁止し、全面的核実験禁止条約を早期に締結すべきであります。

議長

この際、被爆地広島の前市長として、中東湾岸危機に関連して発言することをお許しいただきたいと存じます。

私は、イラクの行為に対する国連の諸決議を支持するものでありますが、同時に武力行使を回避し平和的手段によって中東湾岸における解決が図られることを強く望むものであります。

しかし、湾岸危機爆发直後、イラクは生物・化学兵器の使用を、米国はこれに対し核兵器の使用を威嚇的にほのめかし、最悪の場合、核戦争を予感させる状況にさえあります。世界の世論は、イラクの侵略行為を強く非難しながら、さりとして、いかに正義のためとはいえ、核兵器使用の大義名分を多国籍軍に与えるものではありません。

ヒロシマは、45年前の悲惨な体験から、武力行使の回避、なかならず核兵器及び生物・化学兵器の不使用を強く訴えます。国連の権威と名誉をかけて、関係諸国にその不使用を強く要請すべきであると思います。

議長

私は、広島市長に就任して以来16年間、世界最初の被爆地広島の前市長として、国連主義の平和行政を進め、「ヒロシマの心」の世界化に努めてまいりました。過去2回の国連軍縮特別総会での発言を始めとして、国連での数々の思い出が今、走馬灯のように脳裏を駆け巡っております。これからも世界恒久平和実現への確固たる展望を持ち、その実現のために力を注いでいく所存であります。

議長

最後に広島市長として再び訴えます。

ヒロシマは、単なる歴史の証人ではありません。

ヒロシマは、人類の未来への限りない警鐘であります。

人類がヒロシマを忘れるとき、再び過ちを犯し、人類の歴史が終焉することは明らかであります。

ありがとうございました。